

「静かな退職」の何が悪いのかまったく理解できない… 上司世代とはまるで違う「若者と会社の絶妙な距離感」

「静かな退職」増加の向こう側

会社を辞めるわけではない。与えられた仕事はきちんとこなす。しかし、仕事にやりがいや自己実現を求めず、出世やキャリアアップにも必要以上の関心を持たない——近年、こうした働き方をする人びとが増え、「静かな退職」とよばれている。

マイナビが 2026 年 4 月に公表した「正社員の静かな退職に関する調査 2026 年」によると、20～50 代の正社員のうち「静かな退職をしている」と答えた人は 46.7%だった。年代別で見ると 20 代が 50.5%で最も高かった。しかも「今後も静かな退職を続けたい」と答えた人は 73.7%に達した。

この数字だけを見ると、最近の若者は仕事への熱意を失っている」という話にしたいくなる。だが、この数字の“向こう”で起きている変化はもっと大きい。というのも、いま彼らが失いつつあるのは、働くことそのものへの情熱というより、会社や労働社会に自分の人生を預け、そこで根を張って生きていこうという意欲だからだ。

いまの若い人たちは、会社を自分の人格や人生の一部として捉えなくなっている。会社とはあくまで、自分が現実世界で生活するための糧を得るために、決められた時間だけ入って役割をこなす場所になったのである。

「会社員の自分」というアバター

喩えるなら、彼らにとって会社とは「全人格的なかわり」をする場所ではなく、さながらソシャゲのように「一定時間ログインして役割を遂行する場所」なのである。朝 9 時になったら「会社員の自分」というアバターでログインし、そこで与えられた仕事をして、18 時になったらログアウトして、私生活にいる「本来の自分」へと戻ってくる。ここで特筆すべきは、彼らが仕事をする時に身にまとう「会社員アバター」と、「本来の自分」との距離である。

「隠している」つもりはない

「会社員アバター」の設定として必要なのは、せいぜい「〇〇部△△課所属」「この業務を担当」「今日はここまで進捗した」くらいで十分である。他方で「恋人がいる」「去年結婚した」「夫とは大学時代から付き合っている」「将来子どもがほしい」といった情報は、私的領域にいる本来の自分に属するものであり、それは「会社員アバター」が持っていない設定なのである。

「会社の自分」と「私生活の自分」は別の存在

とはいえ昔から仕事の場面では「公私混同するな」「仕事とプライベートを分けろ」とは言われてきた。いまの若い人も同じなのではないかと思った人もいるかもしれない。しかし、いま起きていることはそれとはかなり異なる。ひと昔前の会社員は建前上では公私を分けながらも、「会社あつての自分」という感覚を持っていた。勤務先や肩書きは、その人が社会の成員であることを裏づける重要な属性でもあった。いまの若い世代は違う。「会社あつての自分」ではないから、公私混同のしようがない。最初から“公”の領域に本当の自分を置いていないのである。仕事上の自分は会社員というアバターであって、私生活にいる自分とはまったく別の存在なのだ。

すこし前に SNS では、「会社に一度でも着ていった服は、休日に着ると仕事を思い出してしまうので嫌だ」という趣旨の投稿が大きな反響を呼んでいた。お気に入りの服が物理的に汚れるわけではない。しかし「会社で着た服」という属性が付着した瞬間、それは私生活だけに属するお気に入りではなくなる。この感覚は象徴的である。彼らにとって会社は、自分の大切なものをできるだけ接触させたくない、いうなれば「敵性の異世界」になっているのだ。お気に入りの服も、靴も、趣味も、恋人も、結婚も、すべて「こちら側」の世界にある。そこへ会社という「あちら側」の空気を触れさせたくないのである。だから会社には必要最低限の自分だけを持ち込み、私生活にいる本当の自分は徹底して透明化する。これは単なるプライバシー意識の高まりではない。労働社会を、自分の生活世界の内部にまで侵入させないための防疫線なのだ。

～次号へ続く～

PRESIDENT Online より



なぶる談話室〇〇を探せ！の答え→

←ナプロアース公式 HP はこちら！

